

社会参画をめざした問題解決学習の授業づくり（2年次）

～着目児Aの成長にみる地域教材化の1モデル～

梶本 久子

昨年度の検証結果より、追究していく過程では子どもによって差があるため、一人一人に寄り添った教師の支援や学級集団づくりが重要であること、また、問題解決学習には問題の発見や把握、追究、解決だけでなく、実社会・実生活の問題を指摘することやその問題の解決に向けて解決策を提案するなど「実社会や実生活に参加・参画する力」を含めて問題解決力を育てていくことが社会認識の深まりにつながるということが明らかになった。そのための切り口として角度をつけた地域教材の開発をすることにより、よりよい授業モデルが構成できるのではないかと考えた。そこで、本研究では、総合的な学習と関連した社会科において、子どもたちが切実になる地域教材をとおして社会参画をめざした新しい問題解決学習の授業モデルを考え検証した。

2つの単元における着目児Aの変容過程と、代表的な2授業のあり方について分析し、本研究のねらいであった多面的・発展的な思考力の高まり、社会好きの子を育てる授業、また、個と集団の育ちについて明らかにした。

キーワード：問題解決学習、地域教材、社会参画、着目児、授業分析

1. 研究目的

本研究でめざす子どもの姿

本研究では、1年間をとおして4名を着目児とし、その子の思考の流れや変化、他の子とのかかわりを2つの単元を中心に変容を追いながら、子どもたちが「ひと・もの・こと」とどう関わっていくかをみとることにした。そこで、本授業デザインの有効性を検証するための観点として以下の3点を挙げる。

- (1) 社会科の好きな子どもに育てる。
- (2) 多角的・多面的な視点をもって考える力を育てる。
- (3) 発展的に考える力を育てる。

これらのねらいをもとに着目児を設定した。そこで、本研究での仮説を次のように考え、どのようにして向かっていけばよいかについて、着目児Aを通して2実践を検証していく。

1. 1 問題解決学習

着目児の興味・関心を喚起する地域教材の授業モデルを構築することによって、クラスのコミュニケーションを促進剤として、多角的・多面的視点を取り入れ、着目児の視点から全体に広げ、学びを深化させることができるであろう。

問題解決学習は、単なる学習方法ではなく、子どもの生き方や教師の生き方までを含んでいるものである。そのためにも、子どもや問題を動的にとらえていくことを根源にしていかなければならない。つまり、

問題を子ども自らの生活と結びつけて追究していく過程を大切にすることが必要だと考える。そして、問題を通してその子自身がどう育っていくか、どう生き

るかということを目的にしていけるのだろう。よって、問題解決学習とは、子どもたちが具体的な体験や経験を通して「問題」を発見し、切実な問題を媒介として、他者と関わり合い物事の本質を追究し、「解決」するプロセスを繰り返す学習活動と考える。多くの問題解決学習はデューイをもととする経験主義の問題解決学習を軸にしながらも、「問題」の内容や「解決」の仕方によって多様な論があった。その中で、教科の系統や蓄積を問い直しながら科学的認識を育てていく有用性についての研究があまりなされなかったため、社会認識面の弱さを指摘されることも多く、小学校実践から広がりが見ることができないことは初期社会科を理念とする問題解決学習の大きな課題であると考えられる。

1. 2 着目児とは

前述のように、昨年度の検証の中で、子ども自らが生み出した問いと社会認識の関係について課題があった。子どもの問いを、社会認識に迫る質の高い問いまで高めるためには、着目児のつきたい力を明確にして単元をデザインすることが必要であることが明らかになった。

上田は「少数の子に着目し、その子と他の子とのかかわり、比較の上でこそ見る、一人の子に着目するということはその子の関連において他を見るということなのである。」¹と述べている。一人の子を位置づけることにより、その子どもとの関係性で他の子どもたちをみとっていくのである。つまり、着目児を設定することは、ある子の視点から授業を問うことであり、そのことは「ある子とその周りの子の質」を問い返すことにつながる。教師と子どもがともに育ててきた学級

¹ 上田薫著『知られざる教育―抽象への抵抗―』黎明書房 1992

風土そのものを問われるのである。そのためにも、教師は周りの子とのかかわりを動的に問い直しながら、その子の思考の流れや変化、他の子とのかかわりを追い続けることが必要となる。そして、そういった営みがあるからこそ、その着目児の思考から問題を設定し、問題に対して着目児の追究の仕方、変容を見ることができ、目標を達成したか具体的にみることもできるのである。

また、学校提案にもあるずれの発見のためにも着目児の設定は必要である。着目児をおき、その子の思考の流れや変化、他の子とのかかわりを追い続け、その思考から問いを設定し変容を見て、目標を達成したか具体的に追いながら、子どもたちが「ひと・もの・こと」とどう関わっていくかをみとることができるからである。問題に対して着目児の解決、追究の仕方を見る、つまり、着目児の「わからないことから、わからないことへ」の思考をみとることによって、クラス全体の子どもたちが問い続け、学び続けていけるように支援していくことができるのだ。教師は、学級全体で問題解決へと近づけていくために子どもの考えを把握する。子どもたちの考えを把握し、整理しながら、どの子の考えをとりあげれば学びが深まるのかといった視点を持ち、支援を考え柔軟な計画を立てながら、子どもたち自ら学びを深めていくことができるよう個に応じた支援を大切にしていきたい。

そして授業モデルを通して、子どもたちが複数の眼を持ち、多角的・多面的に判断、意思決定していく力、発展的思考ができる力を育てることが目的である。

1. 2. 1 着目児A

社会科は子どもの生き方に関わる教科である。生きて働く知識を子どもたちのものにしたいと考えている。

着目児の4名は以下にあるが、中でも、特に変容の著しかったA児を抽出した。(4項授業分析ではA児さとり、B児しんじ、C児たける、D児ゆうた)

観 点	A	B	C	D
社会科が好きである	×	○	△	○
多面的視点をもつ	×	×	○	○
発展的思考力がある	×	○	×	○

A児には生きて働く知識をつけること、一面的な見方から、多角的・多面的な見方ができる力をつけたいと思い、A児を位置付けながら授業をデザインした。

1学期の授業「徳川頼宣」や「和歌山の歴史」を身近に感じ始めたA児は、夏休みに頼宣のまつられている東照宮のある和歌浦について毎日のように、現地や市役所・県庁など訪れ調べた。

一面的にしか物事を見られず、不器用なA児に対し、からかいが気になることがある。そこで、A児の「和

歌山県の未来を考え、学んだことをいかそうとする」姿に寄り添い、単元計画をすることで、A児の真摯に学ぶ姿やその変容から、クラス全体の変容へつながり、深い学びできるのではないかと考えた。

2. 研究方法

授業モデルとして、歴史分野では「江戸時代～紀州藩から見える江戸幕府～」、公民分野では「わたしたちの願いと政治のはたらき～現在の陸奥宗光になろう～」の2単元をもとに検証した。

2. 1 社会参画をめざす授業づくり

社会科部の教科提案は「よりよい社会の形成に参画する子ども～地域課題の教材化に必要な教師の視点と方法」である。社会参画とは、よりよい社会を形成していこうと思いや考えをもってかかわることである。そして、子どもたちの社会参画力を育むには、自分と社会とはつながっており、自分も社会の一員であるという考えのもと、社会的事象を自分事として捉えることである。これからは学習を教室で終わらせることなく、生活までふくらませていく必要がある。そして、社会とのつながりを実感し、「自分はどうかしたいか、何ができるか」など実生活に活用していくことを単元に取り入れていかなければならない。そして、社会に働きかけ、インタラクティブな関係をつくることこそ、子どもたちの達成感につながり、自己実現を感じるようになるのではないだろうか。

唐木は、社会参加の5つの必要条件として、「①地域社会の課題を教材化する、②プロジェクト型の学習を組織する、③振り返りを重視する、④学問的な知識・技能を習得、活用する場面を設定する、⑤地域住民との協働を重視する」としている。²5つの必要条件を念頭におき、社会科部では、地域に根差し、現実の社会に提案する社会科授業を目指している。今年度はこの中でも①の地域社会の課題の教材化について研究していった。また、本研究ではさらに2点を加え、下記の3点を中心に社会科単元をデザインしていった。

2. 1. 1 地域の課題を教材化する

まず、地域社会の課題で学ぶということは、教材との出会いを地域にかかわることから見つけ出し、地域の「ひと・もの・こと」とのふれあいの中で社会的事象を考えるきっかけをもたせることである。そのためには、地域との主体的なかかわりをもととする子どもを育てることが必要である。そこで、かかわりの中で見出したよさを実感し、地域との主体的なかかわりをもととする子ども、すなわち地域を愛する子ども(個)を育てたい。地域教材活用の有効性を、以下の4点でとらえている。

²唐木清志・西村公孝・藤原孝章著『社会参画と社会科教育の創造』

- ① 子どもたちにとって身近であり、その中に生活の工夫や知恵やよさを感じることができる。
- ② 見学や調査を通して直接の経験による実感を伴った認識が可能であり、多様性をもち地域の教育資源を活用し関連付けることで、見えるものから見えないものへの社会認識を獲得することができる。
- ③ 実生活にとって切実感がある体験や知識を生かした思考・判断の場面を設定することができる。
- ④ 地域社会への愛着を育成でき、地域社会の一員としての自覚を高め地域社会の発展を願う気持ちを培うことができる。

これら4点が、地域に学ぶことの有効性であり、これらの条件を満たす学習の地域教材化を学習の柱として計画している。歴史単元では、初代藩主徳川頼宣にスポットを当て、和歌山城に残されている物や、現在に語り継がれている政策などを組み合わせ、武士の世の中の様子を学習することを試みた。つまり、紀州に徳川家を置き、大名配置の工夫をしたこと、頼宣から見た参勤交代や城改修など、全国の歴史に関連する事象がある。和歌山と全国のつながりからも江戸幕府の政策が見え、歴史を身近にとらえられると考えたのである。

また、公民単元では、身近な和歌山県の県議会を見学することから、興味関心を喚起し政治の学習の入口として「和歌山県の課題や将来」を取り上げた。住民や県庁への聞き取り、ゲストティーチャーとの学び合いを通して、地域住民の願いを実現していく知識や方法を学び、進んで地方自治に関わっていくことの大切さを知ることができた。将来の「主権者」としてその自己認識を育てることは重要である。そして、政治を意識することができるようになるためには、地域社会とのつながりは必要かつ重要である。

2. 1. 2 プロジェクト型学習を組織する

今年度も1年を通して「和歌山」にこだわった学習「ふるさと和歌山再発見プロジェクト」を計画した。プロジェクト型の学習を行い、和歌山の歴史やまちづくりにこだわりをもった方と出会わせ、学んだことを発信していくことで、子どもが社会に対する見方・考え方を確かにし、意欲的に追究することができるのではないかと考えた。常に「和歌山」のことを意識しながら、社会科だけにとどまらない横断的な学習で、和歌山から日本の歴史や政治について学んでいく。そして、年間を通し、地域の多くの教材と出会い、博物館、県庁、市役所、NPOの方々などそれぞれの教材に関わる方々からの聞き取り調査等、地域住民と協働していく。

原田は、「歴史学習は、歴史を通して、社会について分かり考え、民主主義社会の形成者としての市民に求められる資質・能力を育成する学習として成立しなけ

ればならない。学校歴史教育の基本的な性格は、「市民性教育」である。」と述べている。³つまり、歴史教育を通して、民主主義社会で生きていくための公民的資質を養うために、社会について分かり考える力が必要であり、社会科はその力を育てていかなければいけないのである。しかし、歴史分野においては、現実の場面と比べて虚構性が大きい。歴史学習の課題として子どもが歴史を身近なものとして考えにくい。歴史や公民は他人事ではなく、自分と関わりのあるものとして捉える必要がある。その仕掛けとして2つの学習過程を入れたプロジェクト型学習を行う。

1つめは、隣接する県立博物館で「子ども学芸員」をする。そして、和歌山の歴史など学んだことをお客さんに説明しながら案内する。そのため、子どもたちが博物館に行く度、学芸員の説明や資料を前にして考えを深める授業の工夫を行ってきた。また、公民分野では地域に発信する「ちいキッズカフェ」で県の課題と観光についての啓発を行なった。どの単元でも常に発信することを目的に学びに向かうようになった。

2つめは、劇化である。劇化することで、生活実感に訴える学習となっている。子ども一人一人が劇の台詞を考え、歴史物語の中に自分の文脈を位置づけることで、自らの歴史像を語ることを可能になる。またそれをもとに仲間と話し合うことにより、歴史物語が構成され、自らの歴史像をふくらませ、編み直すことができる。4月から、台詞として納得できないことが出てくるのが、調べ学習を行うエネルギーになった。特に農民の暮らしについては今までも何度も話し合い調べ学習を行っている子もいる。「劇化」を通して子どもたちは、さらに、農民の姿について追究していくのである。

2つのことを意識させながら、子どもたちのハテナから「戦いが絶えない戦国の世の中から、江戸時代になって幕府による安定した政治が260年も続いた理由を探る」ことを学びの柱に据えた。つまり、1時間1時間の授業をつなげ、江戸と紀州のつながりから目的意識や学習意欲を持続させることによりストーリー性を大切にすることで江戸幕府の支配体制を定着させた。

また、公民分野でも、自分の住む地域のそのまちづくりから日本の政策へと戻し、学んだことを劇化することで、子どもたちはいくつもの情報をつなぎ合わせ、新しい意味を発見しながら判断し、自らの意思を決定していった。現実の公的社會問題に直面するような場面で転移できる学力にするためにも、当事者性をもたせる仕掛けが必要であると考えている。

2. 2 歴史と公民をつなぐ

小学校の歴史・公民学習は、社会認識形成に終始しており、子どもが主体的に学習で学んだことを活用して

³原田智仁編著『社会科教育のフロンティア』保育出版社 P138

いる実践や、意思決定し自分ならどう行動するのかを考える実践などを行うことは難しいと言われている。

しかし、子どもたちのおかれている身近な現在の生活に歴史をつないで考えることは大切なことである。ゆえに、一方的な通史学習や社会認識のみにこだわるのではなく、歴史と公民を子どもたちの生活とつないでいくことが教師の役目であると考えられる。

現在社会は価値観が多様化しているため、自分の考えを表現し、立場や考え方の違う仲間と問題解決し、新たな考えをつくる姿が求められている。そのプロセスの中で、新たな視点や社会認識を獲得したり、深めたりしていく学習が基盤となるのだ。この学びが、歴史と公民の学びをつなぐことであり、公民的資質を養い、未来の生きて働く力となる。

本研究の歴史単元においても、公民単元のそれぞれの政策を選択する政党の姿をイメージできるように、歴史上の人物でも「選挙」をすることで意思決定していった。そして歴史単元と公民単元の学びをつなぐために、複数の単元に「選挙・選択」というキーワードを設定して1年間の学びをデザインした。歴史と公民を問題解決学習でつなげることで、より身近な問題を扱う公民で質の高い価値判断をすることができるのだ。学びをつないでいくことで、自分とのつながりを実感し、将来は自分たちが創造するという意識をもち、公民的資質の基礎を養っていくことになると考えている。

そのためにも、問題解決学習が大切にしている生活経験を生活認識にしていくこと、教科の系統や蓄積を問い直しながら科学的認識にしていくこと、その2つの認識を他者の関係性の中で獲得する認識を積み重ねていくことが、価値認識を高めていくことになるのではないだろうか。その一連の学びのストーリーを紡いでいくことが問題解決と知識の系統化を実現していく一歩となるのではないだろうか。

2. 3 ずれをつくる

ずれを生かすという視点からみると、「ずれの発見」は、授業において生まれてくる「問い」を生む。子どもそれぞれの違い、ずれが授業における「問題」になる。ずれを発見し、追究し、また新しいずれを発見する。その過程に真の学びがある。そのためには、子どもの背景や発言をさぐり顕在化させ授業に位置付けなければならぬ。そして、子ども同士のずれを子ども同士が立ち止まり、ずれを発見していくという子どもが学びを自分のものとしてとらえていく学級風土も大切である。また、ずれを埋めるために間をなくすことをしてはいけない。問題を追究している子どもこそ考えているから間が生まれる。真剣に考えるときに「ハイハイ」と手が挙がらない。つながって深めていくためには充実した間が必要だ。じっくりと考え、自分の考えが確立したときにこそ、話し合いたいという思いが高まる。それが子ども本然の問いである。そして、

教師が、どう間をとり、ずれを生かすか大切である。

本実践では、ずれのある資料提示から子どもたちの思考の深まりをおった。つまり、子どもたちの思考とずれのある資料を提示することで、学びの深まりとなる場面を設定した。そのためには、教師自身が日ごろから予想されるずれを適切に生かし、授業の中に位置づけていく。「教育は子ども理解に始まり、子ども理解に終わる」という言葉がある。子ども理解の上に生まれたずれの発見こそ、子どもたちが追究し問い続けていくことにつながるものではないだろうか。

3. 授業実践

3. 1 歴史単元「徳川頼宣」

3. 1. 1 単元の内容

本単元は、学習指導要領 第6学年の目標(1)(3)と内容(1)ウに基づいて設定した。目標(1) 国家・社会の発展に大きな働きをした先人の業績や優れた文化遺産について 興味・関心と理解を深めるようにするとともに、我が国の歴史や伝統を大切にし、国を愛する心情を育てるようにする。(3) 社会的事象を具体的に調査するとともに地図や地球儀、年表などの各種の基礎的資料を効果的に活用し社会的事象の意味をより広い視野から考える力、調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにする。

内容(1)ウ キリスト教の伝来、織田・豊臣の天下統一、江戸幕府の始まり、参勤交代、鎖国について調べ、戦国の世が統一され、身分制度が確立し武士による政治が安定したことが分かること。について考えた。

参勤交代や鎖国などの政策から為政者の意図をつかませることで、社会的な見方や考え方を養う。また、学芸員の方から、父母状や頼宣すいか、城改修などの政策内容や年貢の取り立てなど具体的にまち歩きや城を見学し学ぶ場面を計画した。そして、江戸幕府の政策を調べることを通して、幕府がどのようにして幕藩体制を整えていったかをとらえさせた。

頼宣によって出された農民の法を見ると、村の治安に関する条文、年貢に関する条文、日常生活に関する条文があり、これらを守らない場合の処罰や庄屋、年寄の連帯責任まで決めている。頼宣の農民支配の厳しさと工夫を考えることで、江戸幕府が長く続いたわけを考えることができた。

3. 1. 2 単元の目標

- ・大名を抑える仕組みが整い、鎖国や身分制度により幕府の政治が安定したことを理解する。(社会認識)
- ・江戸幕府が続いた理由や徳川頼宣・家光、紀州藩に関心をもち、政策や人々の暮らしについて自らの考えをもち、判断を行うことができる(公正な判断力)
- ・江戸幕府の政策と紀州藩のかかわりを考えることに

より、自分たちの生活の歴史的背景に関心を持ち、頼宣だけでなく、力強く生きていた多くの人々の願い、努力や工夫に気づき、よりよい生活をしたい、幸せになりたいといった願いは今も昔も同じということに気付く。(社会とかかわる力)

3. 1. 3 A児にとっての歴史単元の意味

多くの方と交流を繰り返すことにより、子どもたちは、地域の人と共に学びを深め、歴史を身近に感じ、地域に誇りをもつ子も出てきた。

では、A児にとって本単元の意味はどうだったのだろうか。「調べ学習が楽しくなってきた」と書くことが増え、それをクラスで発表することで充実感がうまれた。特に、4. 1で記述しているように、A児の生活につながった発言は多くの先生や子どもたちから、評価をされ、そのことがA児にとって、社会科好きになるきっかけや調べ学習の意欲づけとなった。

単元の終末の劇では、A児の頑張りや変化を周りの子が認めていく場面が増えた。周りに認められることにより、積極的に取り組んでいた。単元を見通した計画を立て実践することにより、A児自身にもわかりやすく、大きな学びになった。

3. 2 公民単元「インバウンド観光」

3. 1. 1 単元の内容

本実践は、学習指導要領 第6学年の目標(2) 日常生活における政治の働きと我が国の政治の考え方や我が国と関係の深い国の生活や国際社会における我が国の役割を理解できるようにし、平和を願う日本人として世界の国々の人々と共に生きていくことが大切であることを自覚できるようにする。内容(2)ア 国民生活には地方公共団体や国の政治の働きが反映していること。これを受けて本単元では、政治は国民生活の安定と向上を図るために大切な働きをしていることについて考える。その手掛かりとして、国民生活には地方公共団体や国の政治の働きが反映していることを調べるようにする。その際「地域の開発」の事例として位置づけた。

1年次は子どもたちが5つの分野(福祉・防災・観光・教育・農林水産業)について調べた。今年度は、子どもたちの興味関心、実態から「観光」分野一つに絞ることにした。

近年、日本のインバウンド観光は年間33%成長した。これは世界でも最速の成長率である。この成長を牽引したのは、主に(円安、中国の経済成長、及び一時的な政策変更(航空業界の規制解除、観光ビザの緩和)であり、この政策変更により海外の旅行者は来日しやすくなった。政府は、インバウンド観光が日本経済の強力な原動力になり得ると考えている。

地域や国土、外国の様子を扱う社会科にとって、観

光を通した学びはその地域の特性を考える習慣を養うことにつながり、地域への愛着はもとより、地域の持続的な利用を考えようとする姿勢を育てる。そして、観光がいかにか多くの産業と関係しているか、インバウンド観光が人口減少や少子高齢化社会をのりきる政策となるか、おもてなし精神の涵養ということも学ぶことができる。

3. 2. 3 単元の目標

- ・地方公共団体の働きや議会・行政・国の支援・住民の関係や政治の役割、政策決定のプロセスについて、調査したり資料を活用したりして調べ、政治の働きを理解する。(社会認識)
- ・他者の意見等とおして、政策についての自らの考えをもち、判断を行うことができる(公正な判断力)
- ・一人一人が主権者としての自覚を持ち、進んでまちづくりに参加しようとする態度を身につけることができる。(社会とかかわる力)

3. 2. 4 A児にとっての公民単元の意味

歴史の授業では、着目児B・C・Dなどの子どもたちの調べ学習の変容から少しずつクラス全体に変容がみられるようになってきた。

A児にとって「大好きな和歌浦」という視点で学んだことは追究意欲の持続にとって大変有効であった。そして、考えを受け止めてくれることに安心して、安定して学びに向かっていた。振り返りも内容、量ともに増えていった。

自己評価も低いA児であるが、評価されることも増え、表情も明るくなった。A児にとって特に本単元は成長するために大きな意味があった。そして、A児を中心にさらにクラス全体に対話的な学びを作ることができた。そして、その学級風土こそが学びの促進剤となり、多角的・多面的思考を育てた。

学習が終わった今でも、A児をはじめ、子どもたちの和歌山の未来に対する思いは強く、総合的な学習として、その学習を継続している。社会科の学習で学んだことを生かして、地道に、地域を愛する輪を広げ、続け、深めていくことができればと考えている。

4. 考察

4. 1 授業分析(歴史単元)

今回の授業は問題解決学習の「話し合い」を中心にした授業である。話し合いの中で友達の考えを受容的に受け入れ統合し、自分の考えを修正・深化させる。

本時では、「頼宣はレジェンド? NOレジェンド?」というB児からでた問題について話し合った。「聖徳太子のときは…」「聖武天皇のときは…」とレジェンドについて再度考え直しをすること自体がメタ認知の入り口になると考えた。問い続けていく中で、本当の意

味でのレジェンドとは何かを考え始める。その考えが、現代社会のつながり、未来のレジェンドという大きいストーリーを形作ることができる。そういった一連の思考が、目標の公民的資質の基礎を養うことになる。

そして、歴史と公民の学びと、自分たちとのつながりを実感し、将来は自分たちが創造するという意識をもつことになるのだ。しかし、二項対立で話し合っているだけでは、深い学びにはならない。

そのために、子どもたちの思考にずれのある父母状の資料で立ち止まり、焦点化し、当時の農民について考えさせるようにした。百姓のお触書と父母状を比較することで多角的な視点を入れる。また、劇化（共有化・焦点化）を取り入れることで、子ども一人一人が劇の台詞を考え、歴史物語の中に自分の文脈を位置づけることができ、自らの歴史像を語ることを可能になる。また、それをもとに仲間と話し合うことにより、歴史物語が構成され、自らの歴史像をふくらませたり、編み直したりできる。

父母状で焦点化の場面

しんじの意見に、違う見方をたけるとゆうたが指摘することで、農民がどう思っていたかに迫る。

しんじ：頼宣がレジェンドと思う。父母状なんだけど、熊野にお父さんを殺す事件があって、儒教の学者が3年かけて説得した。その考えをみんなにもわかしてもらおうと父母状ができた。「親孝行してきまりを守り、質素にして家業に勤め、へりくだりおごらずに正直に暮らすことは誰でも知っているが、常々このことを教え諭さなくてはいけない」

ゆうた：ぜいたくしないってこと。

しんじ：当時の人々に教えてる。この教えを紀州藩全体を教えるために父母状が手本になっている。紀州は自由な気風で、おさめるのは難しいのに、その難しいのを李梅溪と頼宣でおさえたからすごい人。レジェンドの意味は、心と教育したことが大事やと思う。だから、紀州藩全体を教育したことがすごいレジェンド。

しんじはレジェンドについて自分なりの定義をして、本当のレジェンドは何かを感じ考え始めた。

T：父母状のことを考えてほしいんだけど。

父母状の資料から、子どもたちの思考にずれがうまれると考え、立ち止まり、焦点化した。

ゆうた：父母つまり親に孝行したところはいいと思うんやけど、そのあとの言葉がちよっとおかしいんよな。きまりを守るとか、質素にして家業の仕事をするとか百姓のお触れ書きに似ていると思うんよな。

たける：みんな、資料集めてみよか。似ている。この家業とか、質素とか。

子どもから共有化・可視化の提案。子どもたち自身も、自分の意見をより共有できるように自ら工夫する姿が見られようになってきた。

ゆうた：朝おきをし、朝草を刈り、昼は田畑の耕作にかかり、晩には縄をない、俵をあみ、それぞれの仕事、油断無く仕事するべきって、さっき言っていたとこに似てる。1日お百姓の仕事して、1日の仕事してとか…

内容でなく目的という言葉を考えさせることで、たけるの意見が共有化できたのではなかったか。

たける：父母状は、孝行の後の文は、人をおさえるためのもの、つまり、農民をおさえている。だから、父母状と百姓のお触書は、内容ではなく目的が似ている。父母状はいいことかもしれやんけど、結局百姓のお触書のようなものなんよ。

さとる：父母状っていうたらね、僕はO幼稚園やったんよ。最後の卒園式で父母状読んで、いつも覚えさせられてた。その時、なんかよくわからなかった。でも、今勉強してわかった。父親とか、親を大切にすること。そんで、今勉強してそれも教育だとわかった。【①】

自分の生活につなげた意見である。歴史と生活はつなげるのが難しいが、地域教材がもつよさが、さとるの意見に表れた。

しんじ：ゆうたの話は、下の農民の目線の立場。他にも頼宣や武士、大名とか、(板書をさして)もつというろんな立場の人いる。いろんな人の立場でカフェで劇するやん？だからいつもと同じで劇化をしようよ。

単元のゴールにつなげた意見である。子どもたちの大部分が劇化で深まるという意識がある。難しくしておちかいていた2名の子どもも、劇化をすることで自分の考えを話すことができた。振り返りや子どもの実態からみても、劇化を行うことで、頼宣や家光、農民の思いに気付かせ、思いに迫る場面を取り入れることができ、劇化の有効性を感じた。

①「父母状について紀州藩そこまで言っていて委員会グループ学習、その後、前で劇化

たける(農民の大人)「父母状ってわしらをおさえるつなげたいに出されたんじゃ」

みほ(農民子ども)「でも、めんどくさいから親孝行する気ないよ」

だいき(李梅溪)「農民からそう思われるのも仕方ない。そんな意味もこめているからなあ。でも、親孝行して親の言うことききなさい。」

さり(頼宣)「今気づいた。事件をなくしたいと思ってたけど農民を苦しめてたんやな」

このグループは、たけるの意見が強く出ている。

けいた(頼宣)「ちゃんと父母状を守り、父と母の言うことを聞き、親孝行するのじゃよ」
しんじ(李梅溪)「父母状はきまりとかじゃない。儒教をみんなに知ってもらいたいのじゃ」
ゆき・あい(農民)「いややけど守りたい」
しんじ:でもさ、父母状はきまりちゃうやろ?
たける:でも、守らな罰みたいなのあるやろ?
T:じゃあ、劇をしてわかったこと、書いてね。
ひなき:農民とかは父母状はしぼりつけられている
頼宣と李梅溪はそうは思ってた。なかった。
ゆり:農民がしんどい思いをするため父母状があった。
はるや:農民は頼宣や李梅溪に感謝している。農民はそこまでわかっていなくて頑張ろうって思ってる。
はる:父母状は農民とかに、しぼりつけていた
さり:農民の中でも人によって違うし、父母状の取り方も人によってちがう。

ひなきやゆりにとっては、たけるやゆうたの意見から、父母状に違う見方があったことを理解したから出た発言である。またはるやは、父母状には違う視点があっても、まだ、農民はそこまで理解していなかったという意見である。多くの子はこういった2つの意見をもっていた。しかし次に出てくるさり、しんじ、ゆうた、たけるの意見で深い学びにつながっていった。

ゆうた:頼宣とか農民とか色々な立場から見ると、見方が変わることがわかった。【②】

社会科、特に歴史学習の見方・考え方において、大変重要な意見である。

たける:続けて、見方を変えたら見えてくるものも変わる。そのために先生はこんな対立がわかりやすい板書(さして)したんやろ?みんなで考えた公式「権力者は支配する人たちを力で押さえつけている」ことが今回もわかった。【③】

子どもたちの振り返りからも「ホワイトボードを見て、わかることができた」という意見もあった。たけしの意見が共有化につながった。子どもの見方や考え方がより多面的に確かになった。

しんじ:でも、農民の努力があってこそその江戸時代。農民たちは工夫して江戸幕府を264年続く支えとなった。そして、ゆうたやたけるがいったように、見方が変わると見え方が変わるので、頼宣に対してもそ

うだからカフェの劇でもレジェンドとノーレジェンドのところも台詞に入れていきたい【④】

仲間の意見をうけて、単元の終末を意識してふくらませている。しんじは、常に農民の努力や工夫について発言している。次時では、しんじの考えを通して、幕府の政策面だけでなく、264年間支えた農民の姿を明らかにさせた。

授業の後半「父母状」をめぐってグループ活動を行った。(下線部①の場面)「深い学び」について多くの方から意見をいただいた場面が2か所あった。

以下、本実践について書かれた論文を記す。

「父母状」とは頼宣が儒者李梅溪に作らせ、頼宣が出した触書である。この父母状を出すことにより江戸時代の社会システムがどのようなもので、どのように作り上げられていったか考えることができる教材である。B児は父母状を「人を抑えつける法律」と、外在的な秩序形成のための法令とらえ、C児は「教育(内から秩序をつくる仕掛け)だ」と一貫して主張した。その後、話し合う中で「農民の中でも人によって違うし、父母状の取り方も人によってちがう。」C児(下線部③)B児(下線部②)の言葉から、父母状という事象について、支配者と百姓という2つの立場では見方が異なること、百姓という1つの身分であっても、その中に多様な見解がありうること、政策は意図せざる結果を招きうるなどについての気づきと言える。⁴

ずれのある資料・父母状を取り上げることにより、子どもたちは社会科の見方・考え方を使得って、他に転移できる考えや一般化できる考えが生まれ、学びが深まったといえる。

もう一つの場面は、A児の発言(下線部①)である。

6年という時間を経て学びを振り返るA児の意見は地域教材の強さも表れ、子どもたちもうなずいて聞き深い学びにつながる一端が見えたように感じた。

本授業から「頼宣」や「和歌山の歴史」を身近に感じ始めたA児は、夏休みに頼宣のまつられている「東照宮」のある「和歌浦」について毎日のように、現地や県庁など訪れ調べた。社会科は子どもの生き方に関わる教科である。生きて働く知識を子どもたちのものになりたいと考えている。

次の公民の実践では、A児にはさらに生きて働く知識をつけること、一面的な見方から、多角的・多面的な見方ができる子にと思い、A児を位置付けながら授業をデザインした。A児の視点から授業を問うことは、周りの子の質を問い返すことになると考えている。

今回4人の着目児を中心に変容をみていった。4人が仲間との関わりを動的に問い直しながら、その子の思考の流れや変化、他の子との関わりを追うことがで

⁴参考 岩野清美「地域教材を生かし、時代の社会システム

の理解をめざした社会科歴史授業」2017

きた。その着目児の思考から問いを設定し、問題に対して着目児の解決、追究の仕方、変容を見ることができた。仮説については、多角的・多面的な視点をもって考える力を育てることについては、そういった視点をもつ子から、その考え方が広がるきっかけとなる単元になった。ただ、発展的思考については、今後の課題となった。

また、地域教材の有効性については、子どもたちは学芸員さんの出会いや校区の建造物等と対話しながらストーリー性をもって学んだ。多くの方からもこの教材化については賛同の言葉をいただいた。妄想や根拠のないものではなく、歴史的事実を学芸員さんや博物館で確認しながら学習を進める「歴史学」と子どもたちの文脈にのった「歴史教育」を往還しながら学ぶことが子どもたちにとってわかりやすかった。

実践を通して、多くの方と交流を繰り返すことにより、地域の歴史を身近に感じ、地域に誇りをもつ子もいた。これからも、出会った方々とは、交流を続ける予定である。今後も、社会科の学習で学んだことを生かして、地道に、社会科学学習の輪を広げ、続け、深めていくことが地域のDNAとなると考えている。

4. 2 授業分析（公民単元）

A児から出た問題「和歌山市（和歌浦）を6Aのインバウンド観光のイチオシにしたいんだけど、みんなどう思う？」について話し合った。これまでの授業では子どもから出た話し合いを中心に進めてきたが、今回は、その話し合いを中心にするのではなく、資料提示から子どもたちの思考の深まりを追って言った。つまり、子どもたちの思考とずれのある資料を提示することで、本時の学びの深まりとなる場面を設定し、練り合っていく場を中心にするようにした。

インバウンド観光では「ゴールデンルート」という言葉が多く出てくる。ゴールデンルートとは、新幹線を使って巡る人気の高い観光ルートのことである。現在、以下GR（ゴールデンルート）の宿泊施設が不足してきており、GRから広く地方へ訪日外国人を誘致することが求められている。その中でずれのある資料として、GR外で空港もなく、港もない岐阜県が外国人宿泊者数ランキングで上位になった理由、政策と和歌山の政策と比べることで、近隣の地域、他府県と連携していくことや、おもてなしについて考えるきっかけになればいいと考えている。

課題に関しては、観光地のよさや政策を調べることにより、多種多様な立場の人の思いや行政で働く人の願いに気づくこともできるのではないかと考えた。和歌山県の予算の中で観光が占める割合は少額である。予算について考え始めている子もいるため、今後の県の予算や税金の働きなどの学習につながっていった。

着目児A児の「ぼくは、日本遺産の和歌浦を6Aの一番のインバウンド観光のイチオシにしたいです。聖武天皇や頼宣が愛した景色は歴史のストーリー性もある。みんなはどう思いますか？」という作文をもとに話し合った。

その後子どもたちからは世界遺産の高野山が、県のターゲットの欧米人対応になっていることや、和歌山の売りである自然の観点からジオパークやラムサール条約に認定されている串本についてなど、話し合いが続けられた。子どもが焦点化していく場面と教師の資料提示によって焦点化していき深い学びになった場面をあげたい。

いぶ：和歌浦と考えず、歴史のストーリー性を考えて、岡公園の陸奥宗光や和歌山城、おもてなし忍者など6Aらしいストーリーでつないでいくといい。
たける：そんなふうにつないでいくことはすごくいいこと。でも、和歌山は政府の推しているGRに入っていないなかつたり、高速道路、新幹線が通っていないなど、解決すべき交通の問題が多い。だから、交通が不便な分、ありのままの自然が残っていてそれが魅力的な高野山や熊野古道のようなところと和歌山市をつなげてアピールするといい。

和歌山市が高野山、串本かという視点で話していた。いぶ、たけるのつなぐという言葉やゆうたの資料から、県の観光地が繋がっていない現実を知り、和歌山市と高野山をつないでいくという発言が学びの深まり（焦点化）となった。それをうけ、しんじがWBで地図を書いて説明することで、さらに和歌山県全体をつないでいく意見が可視化共有化できた。

ゆうた：その日本地図にも書いてるけど、和歌山の中で新しいGRを作ったらいいと思ってる。岩永さんからもらった資料「外国人観光客が和歌山市と一緒にどこを訪れたか」聞いたら、大阪にいった34%なんだけど、高野山1.4%、箱根・富士山も1.4%なんよ。

(C： えー??やばいやん。そんなんあかんやん) 今の状況みたらたけるの考えもいいけど、このままやったら、県内やのにつながりが弱いことがわかる。紀南では聖地巡礼バスが人気っていった。(地図をさしながら)、点々としたものを線で結んで、ストーリーバスつくったら県内の周遊にもなる。一個一個の観光地を育てるのもいいけど、つなげることが大切なんよな。

しんじ：ゆうたに続けて、点を線でつないでいくのは賛成なんよ。ここ、和歌山市、和歌浦。ここが高野山、串本、白浜はこら辺。これら全部つなげるといい(日本地図を指し)ここに昇竜道ってある。ぼくもつなぐということで調べていたら、見つけたんやけど、愛知から北陸全部能登半島とかを道路や車、

新幹線でつないでいる。和歌山って新幹線とか地下鉄ってない。和歌山がモデルになって、和歌山GRみたいにこうやってつなげたら外国人も行きやすいし移動もしやすいから和歌山市からどこかへいく行くのも行きやすくなる。だからさとの和歌浦も含めて和歌山のいいところつなげるのがいいと思う。

T 和歌山はGRがなくて観光客少ないって言うたよね？和歌山は、この資料で2016年の外国人の宿泊者数19位なんです。でも、岐阜は空港も港もないしGRから離れてるのに14位なんよ。

今までの授業は、子どもたちが焦点化していく場面を大切にしていた。本時では教師から資料を提示した。資料から社会的認識のずれを実感することで、一面的に見ることが多いさとのや和歌山だけがよくなればといいと思っている多くの子どもたちに、新たな視点（深い学び）がうまれた。

C え？なんで岐阜が・・・(口々に)

C 絶対なんかしてる

T そう！その通り、なんかしてるんよ。考えノートに書いて下さい。

その後、子どもたちからは、地図帳や既習事項をもとに、考えを深めていった。地理的な要因について話し合った後、他県とはひと味違ったインバウンド戦略「岐阜モデル」の成功の秘訣の資料の話になる。

たくみ：岐阜が他県と違うインバウンドでは、1番の知事が自ら現地に行って宣伝っていうのは仁坂知事やってるやろ？5番の県・民間・学校・産業の全ての関係者が力を合わせてつながるができていないから一番大切やと思う。いろんな関係のひと力を合わせるって、つまり線と線が繋がる。

ちあき：和歌山の人は何もないっていうけど岐阜にはそんな人いないと思う。理由は5番の全員が力を合わせて協力してるからそうなんだと思った。和歌山もすればいいと思う。

えいこ：私も5番が大切と思った。和歌山の人が一一人が来てほしいって思ったら外国人もきてくれる。岐阜も最初は観光客が少なかったから岐阜モデルつくった。そんなふうに関係が大切という県民の意識が大切。和歌山の課題の人口減少を救うには、外国人が11人来たら人口が一人減ってもまかなえるからやいいと思う。

ゆうき：続けて、3(県の中の市町村を周遊する体験ツアー)も4(岐阜の宝ものプロジェクト)も和歌山ではやっている。やっぱり、6の中部北陸9県のつながる新ゴールドルートのことが大事やと思う。地図帳見たら新GRって、北陸につながる岐阜の近くに静岡、山梨、愛知あるやん？富士山近いし世界遺産やん？周りの県と協力してできるGRを和歌山でもしたらいいと思う。

ゆうた：日本地図に岐阜までの14位までを印つけてみた。すごく地域によって偏りある。こちら辺て、昇竜道があるところ。そこらへんはみんな上位にはいつてる。近畿地方は大阪・京都・兵庫が14位までにはいつてる。奈良・和歌山も一緒になって、他府県との協力すればいいと思う。

しんじ：和歌山ができてないことは和歌山何もないよって意識を変えることとGRとかでつなぐだけ。昔に比べて宣伝上手やし観光客も増えてきてる。和歌山は和歌山だけで頑張ってるんよ。岐阜やったら他の県と連携して順位が上がったんよ。和歌山もこれぐらいのGRを作っていけばいい。

A児：そうか！わかった。と言いながら何度も頷く

T：え？みんな前はつながない方がいい。和歌山だけでお金入ったらいいって言うてやん？

ちゆき：それやったら限界あるんよ。和歌山ってUSJ近い。GRから関西一帯をつなぐと日本全体の観光客も増えるやん？少子高齢化もまかなえるかもしれへんやん？

たける：京都と和歌山やったらどっちの方が交通便利やと思う？金閣・銀閣あるやん？でも、こっちだって、高野山あるやん？歴史のストーリーやったら勝ってると思う。今、GR入ってないやん？例えば、茨城は東京の近くやのに31位(タブレット見せる)全然つながってない。交通の便はあまりよくないから泊まってくれない。交通の便が悪かったらいくらきれいにしても来てくれない。やっぱり、高速道路や電車が繋がってるようにしてシルバールート作ったらいいと思う

このあと、単元のゴールである6A観光アクションプログラムにつながる話や連携の大切さについて話す子も多くいた。その中で、交通を何とかしなければならぬというたけるの意見をうけて予算の話になった。子どもたちの予算についての認識を深めるため、次時に和歌山県の歳入と歳出の話をすることを告げ、話し合いが終わった。

調べた事実を整理して自分の考えの根拠をもたせたり、友達の説明の中で、考えの根拠となっている事実は何かを聞き取らせたりしながら、本時の中でその思いがクラス全体に伝わった。

そのために、各自が自分の考えや願いの根拠を持ち、今までの学習を振り返りながら授業に臨むことで、和歌山県についていろんな角度から考え、意見交換し、多くの方から得た断片的な知識を概念的・統括的な知識に高めるための練り合い、高め合いの場になった。そして、住民の和歌山県に対する期待や、地方公共団体の仕組みや役割について気づき、自分の目線で「望ましい和歌山県の姿」を考えると共に、自分は県民の一人であると共に、まちづくりの主役であるという認

識を持ち、進んで地域にアプローチできる社会人として成長していくためのきっかけになったのではないだろうか。今後も地域へ発信することにより、和歌山の将来を大切に考え、自ら行動する態度が育っていくことを願っている。

実社会・実生活に開かれた問題解決学習中でプロジェクト型の学習を積極的に取り入れ、学習過程を大事にして授業モデルをデザインした。

社会参画とは地域と「双方向に交流することや地域むけ発信することだけではなく、教室に閉じない学びが大切なのである。「提案」「発信」することを意識した学習過程では常に習得・活用・探究を往還しながら子どもたちは学びを深めていく。学習の過程で子どもたちの考えが収束、拡散を繰り返し、それぞれの学習過程を往還しながら社会認識を太らせていくことにより、よりよい社会に参画していく子どもが育ち、あらたな問題解決学習が成立すると考えている。

今回、1学期の歴史と公民をつなげ、1年間をつなげて構想した。常に「和歌山」と関連させながら進めていった。しかし、地域教材すべてが身近というのではなく、身近であるから理解しやすいというわけではない。また、社会と関わることが第一となり、社会科としての子どもの学びが不十分になりはしないだろうかと感じている。子どもたちが関わり合い、ともに学びを高めていくことは小さな社会である。話し合いで合意形成していく場合は、将来社会の一員として行われる議論の場と同じものであることから、さらに教材研究を丁寧に行い、教科内容に即したものを教材化していくことも必要である。

4. 3 2つの授業から

本単元を通して、着目児を中心にさらにクラス全体に対話型学習が大好きな雰囲気を作ることができた。

特にA児のように、進んで地域にアプローチできる社会人として成長していくためのきっかけになった子がいたことを嬉しく思う。そして、クラスとしても社会科の学習を通して“和歌山（地域）を愛すること”の大切さを学んだ。学習が終わった今でも、子どもたちの和歌山の未来に対する思いは強く、総合的な学習として、その学習を継続している。着目児の変容からさらに多くの子どもが、社会的事象を比較したり、複数の社会的事象を結び付けて、関係を見出したりするなど、複数の側面から社会的事象を見ることができるようになった。一方、B・C・D児のように複数の社会的事象を結び付ける思考は、社会的事象を比較し再構成する活動を繰り返すことをとおして、複数の側面から社会的事象を見る力が育成されたものと思われる。

またその両極をみて第三者的に位置づける発展的な思考が着目児を中心にうまれ全体へと広がっていった。

5. 成果と課題

4の考察でも述べたように、着目児A児の姿をとおして、2つの単元「社会参画をめざした問題解決学習の授業」を実現することによって、クラス全体に多面的・発展的思考力が育っていく姿が検証できた。また、もう一つのめあてでもあった社会科好きの子を育てる授業づくりにもつながった。そこで、この授業づくりから以下3点の成果と課題について明らかにしていきたい。

5. 1 地域課題の教材化

地域教材は地域の問題であると同時に、他の地域や国にもつながる社会問題としての側面がある。地域教材である和歌山県の課題ということで、興味・関心の高い社会的事象と関連した問題を設定し、社会事象を自分のものとしてとらえさせた。またそのことにより、子どもたちの多角的・発展的な思考の深化につながったと考えている。一方で、さらに発展的思考・多角的思考を深めるためには、できるだけ多くの意見に触れさせ、思考を揺さぶらせることや多くの具体的事実で獲得した知識を通して、仲間や他者に共有してもらえ、価値判断をする場面が必要である。そして多くの知識を獲得し、その知識を比較したり、関連づけたりしながら多角的に考察することが、複数の価値を得ることになり、その価値の中から、自分で納得できる価値を選択し、判断をすることができるようになったとき、発展的な思考が深まったといえる。そのためにも、子どもの思考をつなげていくような丁寧な授業デザインが必要である。

また、地域社会の課題を解決するためには、学問的な知識・技能（社会認識）が必要不可欠である。様々な知識を習得した子どもは、実際の生活で活用する。また、その過程で、地域住民との交流を重視し、地域住民との協働が必要である。未来の主権者として、住んでいる地域社会の一員であるという認識をもつことで、子ども目線での「まちづくり」に参加することができた。子どもたちは政策を考え、自分たちの政策の内容で政党がわかれたり連立したりするを経験し、実際の政党の動きに気づいた。また、予算の編成から日本の財政についてつなげて考えるようになった。政策の作成方法一つをとっても、知識・技能として、子どもが習得してきた事柄である。

社会に働きかけるためことで子どもたちは達成感をもち自己実現を感じた。主体的に行動するためにはもっとリアルな社会と関わる必要があるのだ。このような授業を繰り返し行うことが社会参画を志向する公民的資質につながるのであろう。それのためにも授業モデルの学習過程は単線的な学習過程であってはならない。複線的な学習の過程で子どもたちの考えが収束、拡散を繰り返し、それぞれの学習過程を往還しながら社会

認識を太らせていくことにより、よりよい社会に参画していく子どもが育つということが明らかになった。

5. 2 着目児の重要性

A児は和歌浦周辺だけをイチオシにしたいと考えていたが、子どもたちの意見から「和歌山県をつなぐ」ということに賛成していた。そして、資料提示のあとのしんじの言葉に強くうなずいていた。

本時の振り返りでは、

今日の授業は本当によくわかったし、サイコーに楽しかった。まず、和歌山市も和歌山県もいろんな都道府県と協力することで観光がって、和歌山県だけでなく日本もよくなるんだなと思った。でも、最後の予算のことは、交通をよくするだけにお金を使うのには賛成できないなと思った。ぼくは今日の授業の事が小学校の中の思い出で一番になった。サイコーだった。

A児は単元の振り返りでも「はじめは和歌山のことなんて知らないことばかりだったけど、実際に県庁や高野山、和歌浦へ行ってインタビューをしているうちに、問題や現実を知ることができて良かった。」と書いていた。

また、市長や市役所、観光協会、まちづくりに関わるNPOの方々を招待した発表会で、地域に向かって発信された。生活の中の政治を認識できる地域教材として学ぶことができたのである。それは、授業中だけで社会認識を定着させることだけでなく、子どもが「使命感」をもって対話やインタビューしたり、生活につなげて考えたりしたことで、子どもそれぞれの文脈でストーリーを主体的につくっていったのである。子どもたちは地域の問題をより多面的、発展的に理解することができ、一つの立場にだけでない見方や統括した見方をすることができることが明らかになった。

子どもたちの中には学校での生活が唯一の社会的つながりを持つ場であるという子、地域の人たちとのつながりが地域の行事などに限定されてしまう子がいる。このように、自分たちの住んでいる地域とのつながりの比較的薄い子どもたちにとって、身近な人々と関わり合う力を身につけることは、将来的にも必要なことである。子どもたちが自分たちの地域社会の中で主体的に社会に参画できる力を育成するためにも、社会や社会事象に関わって「協働」で学び合うことが必要である。しかし、社会参画に重点を置きすぎることによって、学習で行われる関わり合いが一過性のものになる恐れも感じた。地域教材の位置づけとして、今回は単元・授業レベルで検証した。しかし、教育内容に対する関連性や系統性まで念頭において開発をおこなう必要も感じている。そして、社会事象に関わって、自ら問題を見つけ解決していくために「協働」で学び合う

場を何度か設定することで、子どもたちが大人になってから社会に主体的に参画する力を身につけていけるものとする。

本実践では子ども相互の応答や議論は多くみられた。

子どもたちから意見が次々と出され、考えが深まっていた。また、子どもたちは自分の意見を丁寧に出し合い、内容をつなげていた。このように、子どもの授業への参加意欲も高く、様々な視点から問いについて検討することができていた。

A児以外のB・C・Dの着目児の気づきは他の子どもにも伝わり、仲間の考えを揺さぶることができた。本単元では指導助言の先生からも「本来の着目児の意味を成す授業であった」と言っていた。

5. 3 学級風土

クラスのコミュニケーション、学級風土として明らかになったこともあった。それは、受容的な風土をつくるだけでは、集団を媒介にして個の学習に返していくことはできないことである。受容的な風土を土台としながらも、それにとどまることなく、公共圏の中で、様々な異質の個が激しいやりとりし、考えを深めていく風土づくりも必要なのである。お互いの意見をたたかわせながら問題解決に向かうときに、自分や仲間と言及したり、より質の高い学びに向かったりする。そういった集団を作っていくことで、自立できる個を育て、個の学習や生活に返る学びがうまれるのである。子どもたちがとことん話し合い、時には涙や汗を流しあい、自分の個性がいかされていると実感できる居場所もあるのではないかと考えている。つまり、ただ、受け入れてくれるだけでは居場所であるとはいえないのだろう。子どもの一人ひとりの「自分の出番」があり、仲間とつくっていく自治的なものでなければ本物の居場所にならない。この関わり合いの積み重ねが「自分の学級」にいるという居場所感や一体感をうみ出し、相互作用のもとに知識を構築していくこともわかった。

今後、子どもたちが自分の本当の言葉で語り、聴き合い深め合い取り入れながら、夢中になり没頭する授業ができる学級風土をめざしたい。

今回、グループ学習を単元の中に多く取り入れたことで、子どもたちは同じグループの仲間や他グループの仲間との関わり合いの中で学びを深めていった。また、全体学習でも同じテーマの下に話し合い、合意形成していく場を多く設けていくことで、子どもたちは共に学びあう関係性を築くことができた。それは、社会科が嫌いや好きという問題でなく、学級の問題として真剣に考える姿へと変容していった。さらに各分野の調べ学習から、和歌山県に関わる共通の問題へ子どもたちの意識が広がり、これから社会の一員としてどうあるべきか考え始めた。それまでは、ニュースや教科書を第三者的にみていた子どもたちが、和歌山に住む一人の住民としてどうあるべきなのかを考える必要

が生まれ、各部署の課題同士を子どもたちなりにつなげていく思考を始め、クラス全体に広がっていき、全体の意識の向上になった。

それらの積み重ねが「6 A観光アクションプラン」の学習での提案書の作成、それを基にした話し合い活動にいかすことができたと考える。聞き合える関係性の構築は大切なことである。今後も、協働で学びを深めていくことのできる授業モデルの修正を考えていき、子どもたちの社会参画する力を育む問題解決学習の展開について考えていきたい。

5. 4 終わりに

現在、社会の急激な変化とともに価値観が多様化しているため、学校教育でも、自分の考えを表現し、立場や考え方の違う仲間や人と問題解決し、新たな考えをつくる子どもたちを育てていくことが求められている。そのためには子ども自身が常に社会事象を自分の生活と関わらせながら考えていくことが必要である。

そして、教師は教科内容をふまえ、新たな社会的事象を教材化し、子どもたちが主体的に価値判断・意思決定をする力がつくような授業デザインをしていかなければならない。しかし、重要なのは活動そのものではなく、子どもたちが夢中になって探求に取り組む真正の学びにならなければいけない。

そのためには問題解決学習が基本となり、一人一人が問題を見つけ、これまでの生活体験や学習、知識・技能を活用して、子どもたちが問い続け、追究し続けていくプロセスの中で、新たな視点や社会認識を獲得したり、深めたりしていくことはいまでもない。この学びが、歴史と公民の学びをつなぐことであり、公民的資質を養い、未来の生きて働く力となると考える。

子どもの経験や知識を踏まえつつも、それに挑戦し乗り越えていける真正の学びを促すような新しい問題解決学習を確立するために、本授業モデルを検証した。

問題解決学習は、1時間の授業で解決していくものではないと考えている。本モデルのように社会参画を目的としたプロジェクト型の学習で単元を貫く問題があり、この解決のために問い続ける子どもであってほしい本研究で開発した授業は、まだまだ不十分なところがある。今後は子どもたちの思考活動や知識獲得に視点をあて、さらに、発話や交流を質的に分析することを通して授業モデルの実態を明らかにしたい。

また、仲間とかかわり、身につけた思考や事実を、内在化し、アウトプットしていく中で、発信の場の設定を教師がデザインしていくことは、実践知の低い教師だけでなく、学校の実情も含めて難しいことが昨年度検証できたため、今年度は、子どもや教師の実態に合わせる形でより授業モデルの整合性を高めた。

着目児Aを追った1モデルではあるが、今後にかかしていける実践となった。

上田薫著『個を育てる力』、明治図書、1977 P121
谷川彰英著『問題解決の理論と方法』明治図書 1993
武藤文夫著『問題解決学習の活力』 黎明書房 1992
原田智仁編著『社会科教育のフロンティア』

保育出版社 2010 P22

上田薫著『ずれによる創造』黎明書房 1973年

上田薫著『知られざる教育—抽象への抵抗—』

黎明書房 1992 P281

岩田一彦著『社会科固有の授業理論・30の提言—総合的学習との関係を明確にする視点』明治図書 2001

ロジャー・ハート著 木下勇・田中治彦・南博文（監修）
『子どもの参画—コミュニティ作りと身近な環境ケア
への参画のための理論と実際』 萌文社 2000

唐木清志・西村公孝・藤原孝章著

『社会参画と社会科教育の創造』学文社 2010
(2016) 和歌山大学教育学部附属小学校紀要 No. 40